

若者の「性」について考える：
性の解放が進む中で、HIV感染を防ぐことができる
のか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五十嵐, 香織 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/29824

～性の解放が進む中で、H I V感染を防ぐことができるのか～

◆はじめに

日本でもエイズ感染拡大が予測される今、日本の性の現状について、自分自身の性について見つめ直したいと思い、卒論で「性」を取り上げることにした。また、世界のH I V感染者の大半は10～20歳代の若者である、という事実から若者の行動いかんによって、日本にもエイズが流行するかどうか、かかっているのではないかと考え、若者の性に的を絞ることにした。しかし、日本人の中でも特に、若者の性の解放が進んでいる状況下で、はたしてエイズの流行を防ぐことはできるのか。

◆第1章 若者と性風俗

1. ブルセラ

ブルセラを売る女子高生は、いわゆる不良と呼ばれる子はむしろ少なく、親との関係もおおむね良好で、学校にもきちんと通い、それなりに勉強しているタイプの子が多い。昔のように、親への反発でグレて非行に走り、たばこ、シンナーを吸い、売春をするという構造とは違う。ではブルセラを売る子と売らない子の差とは何なのか。実は、女子高生にとってブルセラを売ることも、お立ち台で踊ることも、もしかしたら売春もそんなに変わらないことなのかもしれない、とさえ思ってしまう。

昔だったら、この一線を越えてはいけないというような倫理観が、今の時代に見つけることができるだろうか。生まれた時から、性情報があふれる中で育った世代にとって、セックスに対する罪意識が生まれにくいことは、当然とは言えないだろうか。さらに、同世代に属する宮沢りえのヘアヌード写真集は、彼女たちの性意識に大きな影響を与えたと考える。人気絶頂期に彼女は脱いだ。自然の中で、伸び伸びと裸体で笑う彼女。見る人に、わいせつだと感じさせない写真集。彼女は、性に対する暗いイメージを消し去ったのだ。

ブルセラを売る女子高生の方に、目は集まりやすいが、買う男性がいることを忘れてはならない。

2. テレクラ

テレクラはある意味で、最高度に洗練された売春あつ旋業と言えよう。電話は退屈しのぎかもしれないし、遊び半分かもしれないが、話の進行具合によっては、性的関係に至る場合もある。経営者は仮に世の中の買いたい男性と、売りたい女性を仲介したとすれば、売春防止法に触れて逮捕されてしまう。ところが、あくまで本人同士の話し合いで行われ

るこの商売なら、その網にひっかからない。ただ話す環境を作っただけなのだから。このように交渉のイニシアティブが女性の手握られている風俗が、今後増えてくるかもしれない。テレクラの隆盛は、性風俗の境界線が引きにくくなりつつある現在の象徴的現象と言えるだろう。

◆第2章 若者の性の現状

1. 性情報はん濫の中で育った若者たち

現代の若者達は、性的（肉体的）成熟を迎える前から、すでに多くの性情報によって、性というものを意識させられている。初めから性の情報に浸っている状況は、自分自身の性を見つめる機会を若者から奪っていると考えられないか。性情報のはん濫と性の商品化は、若者に性に対して過大の期待感を抱かせる一方で、ある種の不安も与えている。雑誌はできるだけ広範囲の読者を取り込もうとするため、様々な性の過程にある若者達を刺激する。進んでいる記事の洪水の中で、遅れている読者はあせることも考えられる。

一方で忘れてならないのが、性の情報をマスメディアにまかせっきりにしてきた日本の性教育である。マスメディアに現れる性は、興味本位のものであり、相手の人間性を乗り越えて、直接セックスに到達しようとするものであり、心の問題には触れていない。しかし、日本の性教育はそれに頼っているのが現実なのだ。

2. 若者の性は本当に解放されたのか

性行動調査を見ても、初体験年齢の低年齢化、婚前交渉を可とする人の増加など、性の解放は進んでいると言える。

また、性をタブー視しないことや男女の性役割、二重規範（結婚に際して女性には処女を求め、男性には童貞を求めない傾向）などに関して、時代とともに、また若い世代ほど男女平等、自由化が進んできている。しかし、生殖器や性行為のみに関心が集中している現代の性文化を、本当の意味で性が解放されたといえるのだろうか。

私は、真の意味での性の解放とは、セクシュアリティの解放であると考え。セクシュアリティとは、「大脳に関わる性、すなわち性衝動とその充足に関係する行動の総体」。つまり、セックスというのは、ある行為にしかすぎないが、セクシュアリティというのは行為でなく存在そのものであり、性的存在としての個人の全人格を含んだ言葉である。

人間は「性」と言う時、性行為だけでなく、その人が人間として生きて行く上で、性がどんな意味を持っているか、人間として、それぞれ男性、女性として、いかに人間らしい生き方をするかという、「人間の性」といった問題を考えていくべきなのであって、つま

り、セクシュアリティの解放とは、ただ性行為のみが自由になるという面だけでなく、人間が人間らしく扱われるという、人間解放の一役を担っている性の解放や自立した人間が異性との関わりの中で、心の触れ合いがあり、男性と女性の性を対等なものにしていくという面での解放である。

現在、非常に狭いセックス（性行為）ということであると、解放されるべきか否かというより、もう解放されてしまっていると言える。セクシュアリティの面からいえば、性は今なお抑圧されていると言える。故にセクシュアリティの解放は、もっと進めなければならない。そして、それは性教育の在り方にもつながって行くと考える。

◆第3章 若者とH I V感染予防

1. 現実主義的対応の必要性

エイズは、性感染症であるがゆえ、危険な行動（例：コンドームなしでの不特定のパートナーとのセックス）を安全な行動に変えること、つまり予防が大切なことになる。

若者の性行動の実態（例：初体験の低年齢化、コンドームなしでの解放的なセックス）からいって、「コンドーム教育はセックスを促す」とか「コンドームさえ使えば、セックスをしてもよいことになるのではないか」といった類いは、現状を前にしては意味をなさない。高校生でセックスするのはありえない、あってはならないという前提に立てば、エイズ教育そのもの自体、成立しない。若者の性の実態をつかみ、現実主義的対応をとらなければ、H I V感染爆発が起きる可能性は高くなるだろう。さらに、日本には「売春婦はいない」という建前があるが、実際には存在している。この法律的建前のために日本政府の対応が遅れた場合にも、大流行する可能性があるだろう。

倫理的に「だめだ」と言って対応が遅れることは避けなくてはならない。

2. 性教育、エイズ教育の必要性

性情報がはん濫する中で、エイズ予防のための正しい情報を見つけ、選び出すためには、性教育、そしてエイズ教育が必要になってくる。

「性は人間そのもの」という視点に立てば、若者に対し「性に近づくな、関心を持つな」と、抑圧する方がおかしいと思う。今、肉体的に成熟する年齢は早まってきているのだから、若者が性に関心を持つことは、当然のことなのではないだろうか。だが、それはフリーセックスを言うのではなく、若者は自由と同時に責任も負わなければならない。つまり、大人として、避妊やエイズ予防などをする必要があると思うのだ。そして、男性と女性との関係をより人間らしい関係に築く、そのための性教育も必要になってくるのである。同

時に教える側にも自分自身のセクシュアリティを見つめ直す必要も出てくる。性というものを、人として生まれてから死ぬまでの生き方の問題として、とらえられるかどうか。子供達に教える前に、教師であれ親であれ、大人が学ばなければならないのではないか。子供達に向かって性の知識を教えるだけでなく、自分自身のセクシュアリティ（性と生の在り方）を素直に語れるだろうか。性についての観念が確立していなければ、性は恥ずべき、隠すべきものという意識の変革がなければ、子供に語れないだろう。

エイズ予防は正しい知識を持つことの他に、自分の身を守るため、必要な時に『ノー』と言える自己成長、自分の行動を自分で決められるようになることが大切である。

結婚前とか、未成年とかの段階での性行動を受け入れるのか、否定するのか。未成年に対して、性交の可能性も含めて、より慎重な選択ができるように、自己決定力、自己選択力を育てるために性教育をやるのか。または、そういったものに近づかせないためにやるのか、今、そこが根本的に問われていると言えるだろう。

日本社会では、まだエイズ感染者への偏見が根強いいため、感染者は名乗り出にくい状況にある。そのことを説明した上で、感染者の人権を守るという視点からの性教育も、必要かつ重要である。エイズを予防するという目的の教育は、逆に、予防できなかった感染者への差別を生んでしまう可能性もあるのではないか。しかし現実には、だれもが完全に予防するのが難しいことは、はっきりしている。だから、感染への注意をする一方で、感染してしまった場合の対応や、隣にいるかもしれない感染者への接し方についても、エイズ教育の場で教える必要があるだろう。そして、その土台があつてこそ、HIV感染者と共生社会が築けるのではないだろうか。

◆第4章 性の未来像

1. エイズが投げかけた問題

性にかかわる病気で数年のうちに必ず死に至るものは今までなかった。例えば、梅毒の場合でも脳梅毒にならなければ30年近く生き延びることができた。エイズ時代を迎え今、性そのものを考え直すのに良い機会である。エイズは恐い病気だが、新しい「性」あるいは「男女の在り方」を生み出すエネルギーに変えていけるか、人間が試されている気がしてならない。

人はだれでも成長に応じて誕生、性、生、死についての疑問や関心をもつものである。そして性は人間の存在（生）と切り離すことができないものである。エイズは性行為にて感染し、死に至る。まさに「性が生である」ことを教えてくれる。つまり人間の死や

き方についてまで、考えずにはおれなくなる病気、それがエイズなのだ。エイズ予防は性、そして生についてどこまで語れるかにかかっていると思う。

エイズは人類にいろんな問題を投げかけた。

生物学的に男と女がいて、たとえ男、あるいは女として生まれても、同性にひかれる人、異性にひかれる人、両方にひかれる人がいる。同性愛者というだけで、会社をクビになったり、しろい目で見られたりすることがあっていいのだろうか。性生活を、人それぞれの生き方であるとするなら、同性愛者だからといって、非難し、人格を否定することができようか。コンドームの使用を女性の方から言うと、男性に不信感を抱かれそうと言えないのはおかしいし、貧困のために売春をするしか生きて行く道がないのはなぜなのか。結局のところ、男女差別や経済格差をなくさなければ、エイズの問題は解決できないと思う。

2. 新しい家族形態、男女の在り方

辞書による家族の定義は、「同じ家に住む親子兄弟」「夫婦とその血縁関係にある者を中心として構成される集団」というように、結婚・同居が条件になっている。

しかし現実には、単身赴任によって別居を強いられている家族は多いし、男女とも仕事を持って離れて暮らし、周期的に会う別居カップルだってある。また婚姻届を出さない事実婚や一人暮らしをする独身者もいる。血縁でつながらない者同士が同居する場合もある。

このように、「家族」の形態や価値観は多様化してきており、これは今後ますます進むことが予想される。また、社会的に決められていた夫婦の役割は、夫婦間の話し合いによって決められていく時代に変化していくのではないだろうか。そして、これから「人間社会における男女の真の役割とは何か」考えていかねばならなくなるだろう。

3. 性意識の今後

日本人の性意識は、この先どう変わっていくのか。性の解放はいきつくとこまでいってしまうのか。それとも性の解放に歯止めがかかるのか。性意識は、日本社会の変容に合わせて変化して行くと思うが、性の解放に歯止めが効くとしたら、そのきっかけは、やはりエイズではないかと私は考える。エイズは今のところ、必ず死に至る病気である。今後、どれくらいの速さでかは分からないが、日本でもHIV感染者は増えるだろう。そうなってくると、だれもが性について見つめ直すであろうし、男女の在り方についても見直すようになるだろう。それによって、セクシュアリティの解放が進むことを期待する。

◆おわりに

卒論で自分自身の「性」について考えることができて良かった。人間の「性」は「生」

そのものであるから、人それぞれ性に対する考え方も違ってくる。ゆえに、性について何が正しくて、何が悪いのかを決めるのは難しく、そのためか、卒論では答えが見つからずに悩むことが多かった。この卒論は「性」についての勉強の第1歩であって、これで終わりではなく、幸い卒業後に就く仕事のおかげで、これから先も考えていくことができる。今後は記者という仕事を生かして、エイズ患者や医療従事者、保健所職員、ボランティアでがんばっている人たちに会ってみたいし、性教育の現場にも取材したいと考えている。卒論で出来なかったことを、現場に出て、これからも勉強を続けていこうと思う。